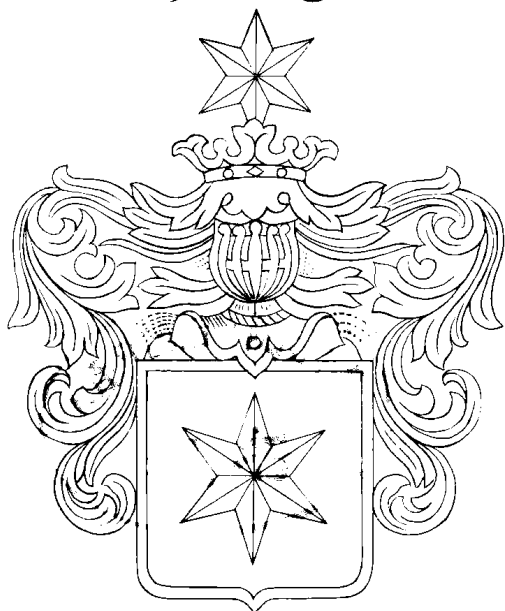


# Goethes Werke



## ゲーテ全集 2

潮出版社

# Goethes Werke

## ゲーテ全集 2

1980年9月16日 印刷 1980年9月25日 発行

訳者	松本道介	藤井啓行
	内藤道雄	波田節夫
	高辻知義	吉村博俊
	飛鷹節吉	平井俊夫
	生野幸吉	高橋重臣

発行者 富岡勇吉

発行所 株式会社 潮出版社  
東京都千代田区飯田橋3-1-3 (〒102)  
電話 販売部(03)230-0741  
出版部(03)230-0781  
振替 東京 5-61090

定価 3200円

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 牧製本印刷株式会社

© 1980, Printed in Japan

乱丁・落丁本は送料弊社負担でお取り替えいたします。

目次

続・詩集（遺稿集より）

山口四郎編 5

西東詩集

生野幸吉訳 83

ライネケ狐

藤井啓行訳 201

永遠のユダヤ人

波田節夫訳 331

ヘルマンとドロテア

吉村博次訳 341

秘儀

平井俊夫訳 411

アキレウス

高橋重臣訳 423

訳注 443

解説 500



ゲーテ全集

第二卷

装幀・中林洋子

続・詩集

(遺稿集より)





ノヴェレより

悲歌

イエス・キリストの地獄行を

めぐる詩的幻想

ミーディングの死を悼んで

シラーの「鐘の歌」のための

エピローグ

ハンス・ザックスの歌の使命を

示した古い木版画への解説

伝説

日記

かわいい夜の天使たち…

内藤道雄訳

”

松本道介訳

松本道介訳

松本道介訳

内藤道雄訳

内藤道雄訳

松本道介訳

”

内藤道雄訳

”

内藤道雄訳

いっしょくた

人生の途上…

ある諭え

たとえ話

いなかの学校のある先生が…

浅知恵

愛と美德

人に宛てて

喜ばしい一七五七年の年の初めに

あたり…

わが友ベールリッシュによせる

三編のオーデ

岩を祓う歌

至福

巡礼の朝の歌

リリーに

シュタイン夫人への献詩から

このおだやかな自然を…

岩間にそだった…

ああ ぼくらはたがいに…

ああ 運命におしひしがれたぼくは…

内藤道雄訳

”

”

”

”

”

”

”

”

高辻知義訳

”

”

”

”

”

”

”

飛鷹 節訳

”

”

”

63

63

63

63

64

64

65

66

67

68

71

72

74

75

75

75

75

75

75

75

75

比喩のおよびエビグラム風に

壺の口はひらいているが…

老雄はひっそりと…

老化によって…

かざした腕

自然と芸術はたがいに…

芸術と絵のための詩

籤壺

”

62

”

61

飛鷹 節訳

61

”

59

内藤道雄訳

55

”

53

松本道介訳

49

内藤道雄訳

47

松本道介訳

42

松本道介訳

38

松本道介訳

37

松本道介訳

36

内藤道雄訳

36

どこにいても休まることはない…

気に入りの別荘の…

フォン・ヴィレマー夫人に

内藤道雄訳

76

朝鮮アザミにそえて

”

76

フォン・マルティウス夫人に

敬愛するフランクフルトの

”

76

十八人の友に

『穏和なクセーニエ』遺稿より

飛鷹 節訳

78

## アネツテ

### アネツテに

本の名前をつけるとき、

昔の人は、神様や

ミューズや友達の名をとったもの。

でも恋人の名前をとった人はいない。

アネツテよ、私の神であり、

ミューズであり友であるアネツテよ、

私のすべてであるお前の名を

どうしてつけてはいけないのだい、

私のこの本に。

### ツイブリス

お話

お嬢さんたち、ここへ来ておすわり。  
ここなら話に邪魔も入るまい。

ごらんよ、春が帰ってきて、  
花をめざまし、歌をめざましている。  
春に免じて私の話も聞いてお行きよ。

うるさい母親は娘によく言うね、  
男にだまされてはいけませんよって。  
それでいてお前たちはひっかかってしまう。  
私その実例を話すから聞いておいで、  
どんな男が危ないかを教えてあげる。

ツイブリスは若くて美しくて、  
愛し愛されるために生まれたような娘なのに、  
惚れたのはれたのという話は大嫌い。  
それも操を守るためではなく、荒っぽい気質のせい、  
この娘の一番好きなのは狩りだったのさ。

あるとき森のやぶのなかで、  
機嫌よく歌などうたっていたこの娘が、  
不意に死人のように蒼くなった。  
ふりさびた椋の梢から、  
角を生やした森の神がとび出して来たからだ。

怪物はにたりにたりと笑いかけ、  
ツイブリスは顔をそむけると、

走り出したが、角を生やした色好みは、まるで火矢のように追ってきて、逃げるんじゃないと叫ぶ。

大声に助けを求めても、どうにもならぬ。足を速めれば、相手も速める。

やっと平地にたどりつくくと、菩提樹の若木に囲まれた池のふちに、エミールがねそべっていた。

助けて！ と娘は叫ぶ。

男はニンフの姿を見て勇み立ち、

手近の柳の枝を一本折って武器にする。

そして森の神があらわれたときには、すでに構えも十分。

相手をあざけりながら次第に近寄り、見るまに決闘のはじまりとなる。

女はエミールの身を案じてぶるぶるふるえる。

美しい女の心は次第次第に

美しい男に傾いてゆく。

敵を砂のなかに埋めてくれんものと、足が動く、腕が動く、手が動く。

あるいは突っこみ、あるいはのびあがる。女を求めての争いに力たかまり、両者がいにふるい立つ。

ついにばったりのびたのは半獣神、強い一撃をまともにくらったのだ。

苦しげにのたうちまわるその姿におさらばしようと、エミールは、近くの池に、えいや！ とほうりこむ。

草のなかに倒れているツイブリスの

とろんとした眼に映る勝った男のたくましい姿、

この男が私を助けてくれたのかしら？

女の子が元気になるのはすぐのこと。

倒れたふりをしてみせるだけだもの。

娘は起きあがる。熱い接吻を受けるとたちまちにして新たな生命がよみがえる。

だが、いったん与えてしまうと、

次から次へと求めてしまわぬかな。

まるでお伽噺みたいに変ってしまう。

見てごらん。接吻また接吻。百度もつづく。いい味だ。

唇に甘い味がする。

それがツイブリスにとつて

初めての接吻だったのさ。本当だよ。

だから彼女はじっと息をつめて

むさぼるように吸いこむのさ。

ついにはうっとりしちまって、

エミールはなんなく彼女を

ものにしちまった。察しはつくだろう。

少女たちよ、あらくれ男が

いいよるのはこわがらなくていい。

こわいのはちゃんとした身なりの男ども、

純愛の喜びなんぞと

きれいごとを並べるやからなのさ。

用心するんだぞ、冗談ごとじゃないんだからな。

冷たくするより賢くふるまうことだ。

自分の心臓の心配をすることだ。

いったんこれをやっちまおうもんなら、

ふふん、からだのほうはずぐだからね。

リユーデ

君たちの拍手で舌もほぐれてきたよ、お嬢さん方、  
ひとつ新しい歌をお聞かせしよう。

でも私の堅琴はえらい詩人たちのように

聖なる炎を燃えたたせたりはしない、

その点はご容赦願っておこう。

これからお聞かせするのは君たちのあまり知らぬことだ。

よく聞いたりえで、よく考えてごらん。

それというのは、二人の男女がしつとりと接吻をかわし、

おたがい会いたくなり離れているのがいやだとなつても、

かならずしも愛し合っているのではないということだ。

少女リユーデがあるときアミンの目を見てお熱をあげた、

少年アミンのほうもリユーデに熱をあげた。

だが困った事情があつて

二人はそのまま幸福になるわけにはいかなかった。

二人の両親が夜になつても目を光らせていたからだ。

親御さんたちよ、娘御が男の側に就いた日には、

用心など役には立ちませんぞ、

とにかく百の眼を光らせることですな。

娘さん方よ、敵の眼をあざむこうというなら、

百の眼をくらませるつもりでな。

少女は策をこらして一時間のあいだ  
番人の眼をくらましてやろうと思う。

やっと逢びきの時間がやってきた、  
少女のほてった口から

アミンは少女の思いを一杯に吸いとってやった。

男は誰にもねたまれずに

甘い接吻を一杯に味わった。

だがあまりご馳走がたつぶりなので

男はそのうちあきてきた。

どんな喜びも味わってしまふと消えるもの。

ああして血をたぎらせていた間、

俺の胸にはいつも愛があつたろうか、と男は考える。

あの娘も俺を誰よりも愛してるんだらうか。

それとも初めて逢つたのが俺だったから

気に入ったんじゃないかろうか。

あるとき男は少女に探りを入れてみた。

親父の奴、俺につらくあたるんだよ。

俺を遠い場所に追いやろうとしてるんだ。

ひどいよ、お前と別れなきやならないなんて！

お前を失うくらいなら命を失つたほうがいい。

いや、リユーデ、俺はきつと帰ってくるさ。  
だが、俺の親友にね、

(このとき少女は地面のほうに眼を向けた)  
とてもうまく歌をうたうのがいるんだ。

この男に君のことを頼んでいくよ。

リユーデはこれがたくらみとは思ひもよらず、

涙にくれ、泣く泣くこれに応じた。

アミンは仕方なく楽園を去るふりをし、

友達のはうがわざと居残る。

友達はリユーデと二人で逢う機会が多くなった。

友達達は情熱の歌、愛の歌を沢山うたつた。

少女は胸をほてらせ、男は大胆になつていった。

少女は新たな思いのうごめくのを覚え、

つつい仲が深くなる。

あげくの果ては——もうお別れよ、アミン。

お嬢さん方、よく目をこらして

思いちがいに気をつけるんだよ。

ものごとのうわべを信じこんじゃいけない。

彼氏に愛されていると思ひこむ前に、

よくよく確かめてみるのがかんじんなのさ。

「おすましさん」をものにする法 第一話

若者たち、好きな娘がうちとけてくれなくても、あきらめてはいけない。母親のしつげがきびしくて、女の子の心が氷みたいに堅くなり、男の愛でどんなに暖めても溶けなくなつたなどというためしはまだかつてないのだから。

そこで、私が何につけ信頼している友達の語ってくれた話をちよつと聞いてくれたまえ。

ぼくは、一人の少女にぞつこん惚れこんでいた。本当に心から惚れていたんだ。だが、その少女は男の子だの恋愛だのと聞くと、すぐ逃げてしまう。母親が男の子とか恋愛とかをとて恐いことのように話していたのだね。だが、ぼくはそれを知つても尻込みはしなかつた。ただ少し慎重になつただけなんだ。

おまえはまだ恋を知らないね、  
とぼくは思つたのさ。

だつて恋を知る女は恋から逃げたりしないもの。

おまえがそんなにもうぶだというなら、

おまえに恋の火をともしるのはお安い御用。

そのうちわかるようにしてあげるよ、

それが恋だとわからない形だね。

森のなかでその娘に会つたときも、ぼくはごく素気なく話しかけたものさ。ぼくのとりすました口調につられて、あの娘も逃げはしなかつたし、ぼくの話聞いてくれたさ。ぼくは友情と呼ぶ高尚な感情についていろいろ話してやつた。あの娘もすぐにうちとけた口をきくようになった。

なにかと恵まれているこの娘には

火のような激しさも具わつていた。

自分は一人お高くとまつているつもりでも、

本当は火みたいに激しく考えていた。

ぼくはその娘の友達になり、その娘はぼくの友達になつた。二人のつきあいは日に日に深まつていった。ぼくが行けば、その娘はよろこんだし、ぼくが帰ると、つまらなそうだつた。

若い男の眼差しに触れて、

女の子の誰もが感じる気持、

それを夢中になつて

友情だとばかり思いこんでいた。

ぼくはその娘とよく二人だけになつたが、母親の言いつけを正面からくさすようなことはしないでおいた。それをゆつくりとたくみに掘りくずしていったんだ。しばらくし



てぼくはあの娘の先生役になって、いろいろいいことを教えてやった。女の子も母親の話よりも次第に好きな男の話のほうを信用しだすものだ。その娘も、母さんの話って全部が全部本当だったのかしらと、疑いを抱きはじめた。ぼくはこれに気づいて、疑いをおおりにたててやった。

あるときその娘はぼくの話に

じつと耳を傾けていた。

そこでぼくは言っちゃったのさ、

友達同士でもキスはするんだぜ、

ぼくと君みたいな友達同士はね——

思いきって試みると——許してくれた。

最初のキスが簡単にやれたから、二回目にも十分期待がもてた。

初めてのキスを味わうと

女の子はかならず次のキスを求めるもの。

ぼくは何度もキスをくりかえし、

あの娘も間もなくキスになれてしまう。

あの娘に会ってキスもせずにいると、

あの娘の眼は何かが足りないかと告げてくる。

計画がうまく運んだので、ぼくの心は意気揚々、そうな

ると人間大胆になってくる。

あの娘の心をこちらへ向けるのは、

思ったほど難しくなかった。

ひとつでも男に許せば、

そのあとも許すにきまつてる。

その次に会ったとき、ぼくは以前にもまして熱っぽく語りかけ、以前にもまして熱っぽいキスをおこなった。あの娘も、これに心を動かしたのが見てとれた。

そこでぼくの腕はあの娘をかき抱く。

あの娘もこれにさからわぬ。

ぼくの口がああ娘の白い胸に触れる。

それでもああ娘はさからわぬ。ところが、

不意にああ娘が跳びあがる。わたし逃げなきや、

こわい方！ と叫んで、もう何も許してくれず、

逃げて行った。あそこまではうまくいったのに。

ぼくの追いかける足どりはのろかった。

あの娘の逃げ足が速くて

追いかけるぼくのほうが疲れてしまったからさ。

“おすましさん”をものにする法 第二話